

序——装いの人類学に向けて

——審美性への着目から

宮脇千絵
風戸真理

<要旨>

近年、ファッション、装い（dress）をめぐる人類学・社会学の領域では、主に、グローバルに広がる生産・流通・消費、または社会秩序とアイデンティティによって、ファッションや装いが規定され、変容すると論じてきた。しかし、それだけなのであるだろうか。装いにおける美しさへの希求や装うことそれ自体の快楽が見落とされているのではないだろうか。そこで本特集では、なぜ人は着飾るのか、なぜ特定の装いが選好されるのかについて考察した。そのため装いを、単に布状のものでできた衣服だけでなく、広く人が文化・社会的規範に則って身体上に表現していることとして捉えた。そして、インドネシア、西シベリア、カメルーン、日本という全く異なる地域の、信仰に基づいた装い、生業に結びついた装い、身体装飾を事例に取り上げ、装いにおける美しさへの希求や装うことそれ自体の快楽が、装いをつくりあげていることを明らかにした。本特集は、これまでの装いをめぐる人類学が見過ごしてきた審美性と快楽という価値を主題にすえて多様な視角から文化比較的なアプローチをとることで、新たな装いの人類学の地平を切り開くことを目的とする。

1 はじめに

なぜ人は着飾るのであろうか。なぜ特定の装いが選好されるのであろうか。近年のファッション、装い (dress) をめぐる人類学・社会学の領域では、主に、グローバルに広がる生産・流通・消費、または社会秩序とアイデンティティによって、ファッションや装いが規定され、変容すると論じてきた [関本 2000; Niessen 2003; Hansen 2004; Aspers & Godart 2013]。確かに、生産体制や消費のあり方、アイデンティティ・ポリティックスは、人びとの装いのある程度規定しているだろう。しかし、それだけなのであろうか。装いにおける美しさへの希求や装うことそれ自体の快楽が見落とされているのではないか。本特集の目論見は、生産や消費といった経済、アイデンティティ・ポリティックスといった政治を踏まえつつも、その先の装うことそれ自体に焦点をあてた、新たな装いの人類学を構想することである。

この特集は、2016年1月10日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で実施されたフィールドネット・ラウンジ企画によるワークショップ「装い／社会／身体——フィールドワーカーによる通文化比較研究」(代表：宮脇千絵、アドバイザー：風戸真理)をもとに構成されたものである。このフィールドネット・ラウンジ企画の意図は、「装い」の研究領域の多様さを長期にわたり文化の内的論理の把握に努めてきたフィールドワーカーがおこなってきた民族誌的調査の成果を通じて示し、議論することで、新たな装いの文化論の構築を目指すこと、であった。この意図に賛同してくれた、筆者らを含めた6名の発表者、3名のセッション・コメンテーター、2名の総合コメンテーターを迎えて、フィールドネット・ラウンジ企画が実現した。当日のプログラムは以下のとおりである(敬称略。登壇者の所属は当時のものである)。

265

開会挨拶 山越康裕 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

趣旨説明 宮脇千絵 (南山大学人類学研究所)

〈セッション1〉

「求められる規範と見出される美しさ——中国雲南省モンの衣装の変化から」

宮脇千絵 (南山大学人類学研究所)

「信じること／装うこと／隠すこと——インドネシアのムスリムのヴェールとファッション」

野中葉 (慶應義塾大学 SFC 研究所)

討論者：西井涼子 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

〈セッション2〉

「毛皮になったトナカイ／キツネ／カワウソ／ハクチョウ——西シベリア諸族の着衣と動物観のあいだ」

大石侑香 (首都大学東京大学院人文科学研究科)

「女性のファッション——ピグミー系狩猟採集民バカのイレズミ実践」

彭宇潔 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

討論者：山本芳美 (都留文科大学)

〈セッション3〉

「牧畜民サンプルの肌とビーズの距離——引き剥がし、再び求める」

中村香子（京都大学アフリカ地域研究資料センター）

「継承し、リフォームしながら装うアクセサリ——モンゴル国の銀製品」

風戸真理（北星学園大学短期大学部）

討論者：中尾世治（南山大学大学院人類学専攻）

〈総合討論〉

討論者：田中雅一（京都大学人文科学研究所）

関本照夫（元・東京大学東洋文化研究所）

閉会辞 風戸真理（北星学園大学短期大学部）

装いをテーマに据えた際に参照したのは、ジョアンヌ・B・アイヒャーのドレス（dress）観である。アイヒャーはドレスを、視覚で感知するものだけでなく、身体への味、香り、音、感情といった感覚の改変（body modifications）と、衣服、宝石、装身具などの補完（body supplements）をも含むものとした [Eicher 1995]。つまり、単に布状のものでできた衣服だけでなく、人が文化・社会的規範に則って身体上に表現していることすべてをドレスと捉える視点である。本フィールドネット・ラウンジ企画は、このドレスを身体装飾や身体加工も含めた「装い」として取り扱うことから出発した。

このように、いわゆる布もの以外も射程に入れることによって、身体にほどこされたさまざまな装飾や加工を同じ地平で語る事が可能となり、また個別の素材（布、銀、毛皮など）の持つ特性を乗り越え新たな論点を提示できることが期待された。そのため、フィールドネット・ラウンジ企画では、銀やガラスなどの装飾品、毛皮やヴェールなどの装具、刺青や割礼といった身体変工を扱い、装いの領域を広げることを目指した。

本特集では、このような目的に基づいておこなわれたフィールドネット・ラウンジ企画での各発表と、それらに対して交わされた議論を踏まえ、生産体制や消費のあり方、アイデンティティ・ポリティックスだけではない、装いの審美性や装うことそれ自体の快楽に着目した、新たな装いの人類学の方向性を示す。以下では、まず、宮脇の研究から装いの審美性についての視角を述べる。そして装いについての人類学の先行研究を概観し、その問題点を指摘し、新たな装いの人類学の方向性を示す。そのうえで、本特集の各論文の内容をまとめ、本特集の全体像を明らかにしたい。

2 問題の背景

この企画をコーディネートした宮脇は、中国雲南省に居住する少数民族ミャオ族のうちモン（Hmong）と自称する人びとの「民族衣装」が、日々の生活のなかで、いかにつくりだされ、着用されているのかといった装いの実践について調査研究をおこなってきた。

本企画の端緒を示すために、この研究の背景と、フィールドネット・ラウンジ企画での発表に基づいた事例を少し紹介したい¹。

中国少数民族の多彩な装いに魅了されていた宮脇は、2006年からの現地調査において、雲南省に居住するモン女性の衣装が、「既製服」となって流通していること、そして当地の女性たちがもはや染織をしておらず、既製の衣装を着用していることに興味を持った。既製の衣装は、カラフルできらびやかな化学繊維の布や、ビーズやレースといった装飾小物を多用し、ミシンで縫製されている。それは明らかに、Tシャツやジーンズといった世界規模に流通している洋服とは異なるものである。しかし2000年代初頭までみられた、大麻を績み、織り、藍でろうけつ染めをし、刺繍がほどこされた衣装(写真1)とも、素材や衣装形態、意匠や色合いの異なるものである。果たして彼女らが着ているものは、「民族衣装」と呼ぶうるものなのだろうか。



写真1 藍によるろうけつ染め、クロス・ステッチをほどこしたスカートを着くモン女性
(1999年9月宮脇撮影)

中国ではマジョリティである漢族との対比において、少数民族の着用しているものは慣習的に「民族衣装(民族服飾)」とみなされてきた[周2005]。しかし、「民族衣装」とは、きわめて政治的な文脈において現れる衣服である。それは、「民族衣装」の差異

1 宮脇の口頭発表の内容は拙著[宮脇2017]に収めたため、ここではその概要を紹介する。

がエスニシティとの境界線と重ね合わされ、同一集団の内に向かっては同一化を、外に向かつては差異化を図る衣服だと解釈されるからである [小泉 1996; Eicher 1995: 300]。確かに、同一集団の「民族衣装」は、個々をよくみれば意匠などに違いはあるものの、基本的に同じ素材、同じ製作技法でつくられているため、全体として似通った衣服となる。そのため、着用している人をみれば、ある程度そのエスニシティを予想、特定することが可能となる。

中国では、1949年の建国後、全国で民族識別工作が展開された。民族の確定の際に参照されたのは、「共通の言語、共通の地域、共通の経済生活および共通の文化に現れる共通の心理的素質という四つの共通」というヨシフ・V・スターリンの民族定義である。民族が確定された後、さまざまな民族峻別の指標のなかでも民族表象の要となったのは「民族衣装」である。中国のプロパガンダにおいては、文化大革命中でさえ、グレイ、青、緑といった地味な色の中山服を着用する漢族と対比させながら、55少数民族の服飾を、それぞれ男女ペアで、カラフルなものとして描いた [Bulag 2010: 77]。

「民族衣装」のもうひとつの特徴は、特定の文化において、長い歴史を持ち、伝統的に使用されてきた衣服であり、日常的な洋服 (global dress) や西洋のファッション・システムとは異なる文脈にある衣服だと扱われる点である [Maynard 2010: 258]。このような視点は、ファッションつまり装いの時間変化としての流行が、19世紀後半における西洋の階級社会の産物であると論じられたことに端を発する。ファッションとは、みせびらかしの顕示的消費をする有閑階級と、それに憧れる下層階級とが、生活様式の模倣と差異化をするという動きの連続だと説明される [ヴェブレン 1998]。したがって、身分や階級の明確な区別のない非西洋では、ファッションは存在しないとみなされた [ジンメル 1976: 39]。それに対し、文化人類学においては、「非西洋」の伝統的、民族的な衣服にも、ゆるやかではあるが変化があるとの主張がなされてきた [Flügel 1930: 129-130; Polhemus & Proctor 1978; Niessen 2003]。しかし依然として、「民族衣装」には固定的で不変であるという印象がつきまとい、西洋のファッションほどその変化の速度は速くないとされる。

このように「民族衣装」が議論の俎上に載るのは主に、政治的な文脈か、近代西洋のファッションとの対比という文脈である。しかし、モンの日常的な装いの実践に触れた筆者にとって、「民族衣装」とは決してそれらの文脈だけで語られるものではない。それが審美性に着目するに至った契機である。

3 雲南省モンの婚礼衣装に求められる規範性を見出される審美性

上記の内容を踏まえ、宮脇の発表では、中国雲南省文山州に居住するモン女性の婚姻衣装を事例として、「民族衣装」とは何かを考察した。

文山州のモンは、長らく、大麻を素材とした布を織ってきた。特に、藍によるろうけつ染めやクロス・ステッチなどの刺繍で装飾をほどこした、膝丈の細かいプリーツの入った巻きスカートが特徴である。モン女性は、婚礼衣装として「モンの衣装を着なければいけ

ない」とされる。夫方居住であるモンの花嫁は婚礼に際して、実母と義母の両方から、モン衣装を贈られる。実母は嫁に行く娘に何着かの衣装を持たせるし、義母も嫁となる女性にこれまでつくりためていた刺繍布などを使用して衣装をつくり贈る。そして、花嫁の魂を婚家へと移すゲン・ブリー (*ngangs blis*) という婚姻儀礼において、花嫁は実家から贈られた衣装から、婚家から贈られた衣装へと着替える。このときにモン衣装を着用すること、そしてそれを着替えることが、重要だとされる。もしそうしなければ、若いカップルに災いが起こる。かつてゲン・ブリーでモン衣装を着用しなかった花嫁がいたが、その後病気になったためゲン・ブリーをやり直したことがあるのだと、ある老人は語ってくれた。モン同士の結婚はもちろん、漢族女性がモンに嫁ぐ際も同様のことが求められる²。このように、結婚に際して、モン女性（あるいはモンに嫁ぐ女性）には、モン衣装を着用しなければならないという規範性が働く。

ただしその際に、どのようなモン衣装を着用するのかに関しては特に規定はない。したがって、若い花嫁たちは、新規性のあるデザインの既製の婚礼衣装に身を包むことを志好する（写真2）。現在の40、50代以上の女性たちが結婚したときは、まだモンの暮らし向きは安定しておらず、最低限の数の衣装しか準備できなかったという。また、2000年に入るころまでは、農村では当たり前のように布を染織し、衣装製作をおこなってきた。それはすなわち、衣装をつくりあげる素材と技術が限定されていたということであり、衣装形態や意匠が急速に移り変わるようなことはなかった。ところが文山州では、1990年代から、モン衣装の既製服化がはじまった。最初は、ある服飾工場が手作業で小規模に生産、販売をおこなっていたが、次第に多くの同業者があらわれるようになった。定期市では60店以上の露店が軒を連ね、2000年代半ばからは独立した店舗も増加した。このようなモンの既製服は、浙江省などから流通する多種多様な化繊布や、ビーズやレース、刺繍テープといった装飾小物を使用し、ミシンで縫製して生産される。同業者が増加するに従い、生産者たちは、次々と新しい衣装形態や意匠をつくりだすことで、同業者との差別化を図るようになった。このようにして、既製のモン衣装のデザインは、変化のスピードを加速させるようになった。

過度なほどに華やかに装飾された目新しいデザインの既製衣装は、とりわけ若いモン女性たちにとっては「美しい (*rongt ngoux*)」、「きれい (*rongt shaib*)」なものとして憧れの対象になった。モンは毎年旧正月に向けて新しい衣装を準備し、旧正月3日目から始まる祭りでそれを披露する。既製服の登場によって、その時に着る衣装に、単なる新品という意味だけではなく、デザインに新規性があり、美しいという意味での新しさが求められるようになっていく。つまり審美性が衣装の変化を駆動させる要因となっているのである。2006年ごろから、沿海部に出稼ぎに行く若者が増え、以前よりも現金収入を得られるようになった。とはいえ、一セット数百元から数千元する既製衣装は、彼女

2 一方で新郎の装いにはこのような規範性は求められない。そのため近年の新郎は洋服のスーツを着用する。



写真2 最新デザインの婚礼衣装を着た新婦とスーツ姿の新郎
(2016年3月宮脇撮影)

らにとって決して簡単に購入できるものではない。そこで結婚式が、このような衣装を購入、着用する恰好の機会となる。このようにして、近年のモンの花嫁の婚礼衣装は、年を追うごとに華美に、新規性のあるデザインへとなっている。つまり、モンの花嫁の婚礼衣装の変化においては、それを着用する人々による審美性の追求が重要なものとなっているのである。

この事例が示すことのひとつは、モンの社会生活においては、モンの衣装を着用しなければならないという規範性が働く場面が存在することである。それは、すでに中国辺境の農村部にも普及しているいわゆる洋服（モンの言葉では「漢族の服（*chaot Shuad*）」）とは明確に区別されるものである。しかしながら、婚礼衣装には、決まった素材の使用、染織技術や製作方法、衣装形態、文様や配色といった意匠に制約はない。昔ながらの大麻を素材としたものであるとか、ろうけつ染めや刺繍が必要であるとか、そのような規定はないのである。そのため、最近の若い花嫁が、町で販売されるカラフルできらびやか、目新しい形態をした衣装を婚礼衣装として選好することに問題は生じない。そしてそれもまた既製品ではあるものの、いわゆる洋服とは全く異なるものである。洋服とは異なるモン独自の衣装を「民族衣装」と呼びうるができるなら、それは文化的な論理に求められる規範性と、着用者の装いの実践のなかで見出される審美性とのあいだに成り立つものとして存在するのだといえる。

この事例に接し、中国の「民族衣装」を従来のように、政治的文脈やファッションとの対比という文脈だけで捉えるのではなく、より柔軟な視点から、すなわちそこに求められ

る規範性と、着用する人びとが求める審美性とのあいだの揺れから捉えることが可能なのだという結論に至った。また、審美性への着眼の重要性は、フィールドネット・ラウンジ企画でのコメントや討論のなかから生まれてきた論点のひとつでもある。これが本特集の根底を貫く問題意識である。

4 本特集の視座

装いに関する審美性は、これまで議論の中心にはなっていない。文化人類学における布や衣服に関する先行研究では、近年拡大するグローバリゼーションとの関係、とりわけ伝統的、民族的な布や衣装が、どのように生産され、流通し、消費されるのか、そしてそれにより布や衣装自体の、あるいはそれを生み出してきた社会の変容を問う議論が蓄積されてきた [関本 2000]。そこで論じられるのは、「西洋」と「非西洋」とのあいだで交錯し、時に両者を架橋するファッション・シーンで繰り広げられる人びとのやり取りの様相である。「西洋」の側が、「非西洋」のトラディショナル、エスニック、トライバル、プリミティブといった要素を取り入れながら新たな流行を生み出す様子や、それとは逆に「非西洋」の側が自らの文化に内在する要素を「西洋」の側に売り込む事例の蓄積が進んでいる [Niessen 2003]。しかし議論は、「西洋」と「非西洋」、あるいは「グローバル」と「ローカル」、「近代」と「伝統」という二項図式においておこなわれる傾向にある。その要因は、ファッションが産業であり、経済活動であるということに集約されるのではないだろうか。売れるか売れないか、儲かるか儲からないかがその判断の中心にある限り、「非西洋」や「ローカル」、「伝統」といった要素がいかに活用でき、変容させて取りこむことができるのかといった点に議論が集中する。もちろん、人、モノ、カネがかつてない規模で往来する現代社会において、衣服に身体装飾や身体加工を含めた装いの生産、流通、消費に着目する意義は大きい。しかし経済中心の議論枠では、装いの審美性、装飾や文様の美しさは、経済的な価値や利益に還元され、民族集団における文化的な意味づけや、個人の好みや快楽が捨象されてしまうのではないだろうか。

また、特定の社会や文化においていかに装うのかに関しては、自己と他者とのあいだでどのような差異化の力が働いているのかという点を中心に論じられてきた。もはやソースティン・ヴェブレンが描いたような身分や階級の差異が明確な社会がほぼみられない現代において、装いによって示される自己と他者の差異化と同一化の作用は、むしろ都市に生きる個人の社会生活の中で可視的になっている [鷺田 1989]。すなわち、かつて民族集団や地縁集団のメルクマールとなり得た伝統的、民族的な衣装を、より即興的に作られた集団を区別するための制服やユニフォームといった衣服と同じ地平で語ることを可能にする。さらに、流行を追うことやおしゃれをすることに着目するならば、自他峻別は、より限定的な自己と他者との区別として現れてくる。装いに関する流行が、社会階層を往来する運動ではなく、メディアによって操作される新奇なものの生起する時間的な分節と、それが陳腐化するプロセスの繰り返しとして現れるようになった現代社会においては、外見が個人の人格と結びつき、外見をつくり上げることがすなわち自己をつくりあげることにな

るからである [Finkelstein 1991]。つまり人は、同じようなスタイルに身を包みながら、装着しているアイテムの、あるいはコーディネーションのわずかな差異のなかに他人とは異なった自分を表現するのである [鷺田 1989: 36-37]。おしゃれに着飾りたいという思いは、自己認識や自己肯定として、あるいは他者との差異化という機能に読み替えられて論じられてきたのである。

これらの先行研究では、装いに付される、あるいは装うことが意味する審美性に関する議論が後景化されているといえよう。装いをその機能性からのみ語るのではなく、また政治的文脈や経済的文脈に限定して考えるのではなく、また自他峻別や差異化の論理のみに落とし込むのではなく、装いの原初的な楽しみである審美性の諸相を浮かびあがらせようとするのが、本特集の試みである。審美性とは、装うものをつくりだす過程や、それを身にまとうときに私たちの誰もが感じるワクワクする感覚や、嬉しい気持ちである。装いを「語る」うえで、このような感情はささいなものに感じられるかもしれない。しかし、服を着ることをはじめとした「装う」という行為が、人にとって普遍的であり、かつ日常生活に埋め込まれていることを鑑みると、その営みは、感情や価値を含めた人の総合的な行為のなかに現れる。そのため、装いを構成するどこか一側面だけを切り取って論じるだけでは、その全体像を捉えることができない。これまで看過されてきた装いの審美性について「語る」ことは、装いを文化的な視点から考察する可能性を開くことに繋がるだろう。

ただし、審美性の基準は文化によって異なる。フィールドネット・ラウンジ企画の総合討論ではそのことを、「美しい／美しくない、似合う／似合わない、顔がいい／悪い等」の価値基準に関して、発表者それぞれのフィールドでの事例を提示してもらい、議論をおこなった。毛皮の扱いが生死に直結する環境と、屋外労働と屋内労働のジェンダー分業が明確なシベリアのハンティのあいだでは、毛皮の扱いが上手い人、衣服をきれいにつくれる女性もてる（大石）。ケニアのサンプルではハンサム、美人だとされる人はいないが、黒い肌に白い歯が目立つことが好まれる。また、立ち姿にこだわりがみられる（中村）。モンゴルでは、20世紀には衣服などの善し悪しへの言及が多かったが、近年では顔立ちが評価されることが増えている（風戸）。ムスリムの場合は、アラブを手本に似合う／似合わないという判断が下される。しかしムスリムの美しさの判断基準は国や地域によっても異なり、インドネシアでは花や鳥の原色が美しいといわれ、砂漠地帯であるシリアでは、夜の世界に美しさがあると考えられており、太陽よりも月が褒め言葉となる。そのため、イスラーム的規範だけでなく、人びとが暮らす文化や気候によっても美しさの基準も変わると考えられる（野中）、といったエピソードが挙げられた。中国モンの場合は、衣服に文様があること、色とりどりであることが「きれい」だとみなされる。シンプルなものよりも装飾過多なものの方がより好まれるのである（宮脇）。

これらの事例は、容姿や装いのどの部分に注目して、どのような尺度で価値づけるのが、それぞれのフィールドの人びとの生業技術、身体的な形質、歴史、自然環境、そして文化固有の信念と結びついていることを具体的に示している。このような議論を積み重ねていくこと、すなわち装いに内在する論理がいかなるものなのかを詳細に検証していくこ

とこそが、文化の多様性に立脚した装いの審美性とその快樂についての探求なのであり、このような研究は、正にフィールドワーカーがおこなう仕事によって達成されることなのである。

5 各論文の概観

それでは、本特集の各論文について概観していこう。

野中葉は、ムスリマ（イスラーム教徒女性）が着用するヴェールを取り上げる。宗教や信仰に規定される装いは世界各地でみられるが、これまでは宗教や信仰を一にする共同体の社会的な規範のみがその装いを決定づける要素であると描かれる傾向があったのではないだろうか。そのため、実際にそれを着用する人びとの実践の内実には不明な点が多かった。それに対し、野中論文はインドネシアと日本に暮らすインドネシア人ムスリマへの詳細な聞き取り調査から、信仰と装いの新たな関係性を論じる。野中は、これまでの装いが、他者との差異化および自己（集団）への同一化という点から論じられてきたことに対し、ムスリマの装いを規定するものには自己と世俗的な他者以外に、自己と神との関係があることを明らかにする。ムスリマ女性たちには、イスラームの聖典クルアーンの記述に従い、ヴェールで身体を覆うことが求められている。しかしクルアーンには、どのように身体を覆えばいいのか具体的には記述されておらず、その実践は着用者の判断に委ねられている。したがって、ムスリマたちはその時々の社会的な状況や自らの好みに応じて、神と対話しながら、ヴェールをいかに着用するのかを決めているのである。

本論の興味深い点は、インドネシアのムスリマだけでなく、日本に暮らすインドネシア人ムスリマに詳細なインタビューをしていることである。そもそも異なる装いの文脈を持つ日本において、彼女たちが自らのヴェール着用を、いかに信仰と結びつけ、アイデンティティの拠り所としているのか、同時に日本で購入する洋服をいかに組み合わせながら、クルアーンの規定に沿った装いを実践しているのかが、生き生きと描かれている。野中論文が示すのは、装いに関する自己と他者の意識以外に、神の存在が装いを規定しつつも、すべてが神によって明示的に決定されているわけではないということである。服を着るという行為が、人にとって日常的で普遍的であるがゆえに、個々人のおこないや好み、何をどのように着るのか、また社会変化にともないそれがいかに変化するのかを決定づけているのである。

大石侑香は、西シベリア・タイガ地帯に居住するハンティという民族集団の毛皮を事例に取り上げる。毛皮は、人間の装いにも大きな影響を与えてきた素材だが、染織に焦点があてられる傾向が強かった従来の布研究や衣服研究においては、無意識のうちに看過されてきたのではないだろうか。また毛皮は、古来より重要な交易品であり、装うものとして着目されにくかったともいえるかもしれない。大石が取り上げるハンティの毛皮着用は、彼らの狩猟・漁猟・牧畜活動という生業、および西シベリアという生活環境と強く結びついており、防寒という機能性に特化した装いである。しかし大石が示すのはそれだけではない。ハンティに通底する動物観について詳細に述べ、ハンティが衣服の素材とする毛皮

には、単に入手しやすく扱いやすいという理由以外にも、彼らの動物観が大きく影響していることを明らかにする。さらに、特に女性の衣装には、審美性を意識した装飾が多くほどこされる。衣装の部位によって、毛皮の耐久性や撥水性、軽さや柔らかさ、毛触り、色合いが使い分けられ、美しさが表現されるのである。また装うものとなった後も、毛皮は単なる物質になり下がるのではなく、着用者はその毛皮がかつて家畜だったときの思い出を有しているのだという。ハンティの毛皮着用には、機能性だけでは語ることはできない、彼／彼女らの動物に対する複雑な態度がみてとれるのである。

彭宇潔は、カメルーンに居住するピグミー系狩猟採集集団バカの刺青について報告をおこなう。装いを総合的に論じるためには、身体加工や身体装飾の事例の提示が不可欠である。バカの刺青は、調査を始めた当初の彭にとっては「雑でよくわからない瘢痕」だったという。しかしバカ女性にとって、それは「おしゃれ」であり「女性のファッション」なのだという。彭論文は、この当事者に内在する装いの論理を丁寧に解きほぐしていくものである。刺青はバカ女性に多くみられる身体装飾であるが、彼女らは、刺青の結果よりも、むしろそれを彫る過程と、それが進行している最中の他の女性たちとの触れ合いを重視しているのだという。そのため、刺青は計画的に彫られるのではなく突発的にはじまるものであり、最初に予定していたデザインと実際に彫られるデザインが異なることも多い。また、自らの身体にかつて彫ったはずの刺青が消えていることにさえ頓着しない人も少なくない。このような「なぜ刺青をするのか」という質問ははぐらかされて、やりたいからやっている」という事例を提示した彭報告に対し、フィールドネット・ラウンジ企画の総合討論において関本照夫からは、装いの根源には、装いをつくりあげる行為に関する世界観があるのではないかと指摘された。つまり、例えば近年日本でも過熱するハロウィンでの仮装のように、何を装うのかということよりも、装うという行為自体を共有することのほうが重視される場面に着目する意義は大きいのではないかとということである。彭は、狩猟採集社会に貫かれる「平等主義」が、デザインの良し悪しや刺青の数の多少などといった「差をつくらない」刺青につながることを指摘する。そのため、目にみえる結果としての刺青よりむしろ、「一緒にやった」という行為の同調が重視されるのだ。それが、我々が想定する差異を求めるファッションとは、大きく異なった文脈に存在するバカの「ファッション」のあり方なのである。

風戸真理は、自文化のなかの異文化として日本の子どもの身体装飾に焦点をあてる。女性の子どもにとって、アクセサリーの着用、化粧、ピアスやタトゥーなどの身体変工をおこなうことの最大の魅力は、彼らの論理による「大人に近づく」という意味づけであった。加工していないより自然に近い身体には幼さ、髪を茶色に染めてつけまつげをつけた身体には「大人らしさ」という価値が付されていた。子どもの身体装飾には、派手に装って人びとの注目を集めることの楽しさ、自身の容貌を自身の手でつくりかえるおもしろさ、身体を通して憧れのアーティストや仲間と同調するコミュニケーション、そして校則に象徴される大人の論理で抑制されるスリルといった、審美性や被抑制感とコミュニケーション性が特徴的であった。特に身体変工をとまなうピアスやタトゥーに関しては、自身の身体に対する興味とこれを加工したい気持ちとともに、親との関係においてはそれを実

行も表出もしてはいけないという独自の倫理観がみられた。その社会的な背景には、アルバイトや就職活動、そして公共の温水浴施設での禁止が関わっていた。他方で、身体装飾をおこなうことが規範化されている側面も示される。子どもたちは大学進学後には装いの規制から解放されるのと同時に、就職活動を皮切りに化粧をおこなうことを期待されるようになる。この転換の過程で、大人になりつつある女性たちにとって、身体装飾の意味が楽しみから便宜に一部変化していた。身体を変工すれば身づくろいの手間が軽減されるのである。同時に、私的な楽しみとともに公的な規範性をも帯びている装飾を取り外すことの意味も指摘される。大人の女性たちは、帰宅時にアクセサリーを外すことで公的な役割も一緒に脱ぎ捨て、より自然で私的な身体を立ちあげることを操作的におこなっていたのである。

装身に関する語とその用い方は多様であるが、本特集では基本的にそれらを著者に任せる。なぜなら、用語は地域の歴史や著者の立場を映すものだからである。

6 おわりに

それぞれの論考は、インドネシア、西シベリア、カメルーン、日本という全く異なる地域の、信仰に基づいた装い、生業に結びついた装い、身体装飾の事例を取り上げたものである。これらに共通しているのは、特定の規範性や機能性に基づいた装いのあり方が規定されていることと、その規定内部にみられる装いの実践の自由さである。野中、大石、風戸の事例においては、それぞれの装いが特定の規範や機能性によって、一定程度定められている一方で、装いのすべてが完全にそのルールに則っているわけではないことを示している。他方で、規定の範囲内において、まったくバラバラな装いがみられるわけでもない。そこには、美しさを希求する審美性が反映されているといえるだろう。彭の事例では、「平等主義」という規範が、結果として残る装いへの執着のなさを示している。ここでは、どのような装い（刺青）であるべきかという審美性がほとんど問われず、徹底して装う（刺青をおこなう）という行為それ自体の楽しさや共同性に特化している。これらの論文は、装いにおける美しさへの希求や装うことそれ自体の快樂といった、これまでの装いをめぐる人類学が見過ごしてきた主題にそれぞれの角度からアプローチしたものといえるだろう。

最後に、もうひとつ付け加えるならば、ジェンダーの問題である。本特集の対象となったのは、意図したわけではないが、女性の装いである。そのため、ジェンダーと装いの関係を考えるうえで重要だと思われる視角として、審美性とジェンダーの非対称な力関係について検討しておく。両者は混ざりあって存在している。ジョン・C・フリューゲル [Flügel 1930] は、フランス革命や産業革命の衣服の簡素化と平等化にともなって、男性服には黒などの暗い色が好まれる傾向が生まれたことを、「男性の大いなる美の放棄」と名付けたが、これに依拠してロバート・ロスは、男性がくすんだ色、控えめで力強い身なりをすることとの対照として、女性は公的な世界から排除されるためにふんわり華やかなものを着たと説明する [ロス 2016: 58-59]。また、男性が家の外で、つまりビジネスにお

いて地味なダークスーツに身を包むことが、女性を公的な場から排除し、それが世界各地で現在まで引き継がれているという [ロス 2016: 59]。公的な場からの排除、あるいは男性への従属としての女性の装いは、ヴィクトリア期のコルセットや、清代中国における纏足からも説明されよう。そして、女性の社会進出や既製の消費が拡大した現代においてもなお、女性のほうに審美性が期待される傾向がある。大澤真幸は、体育が男性に、舞踏が女性に担われるという性別分担を例として、「19世紀の段階において、女性は見られる客体に」なったのだと述べている [大澤 2013: 98]。つまり、現代の女性が審美性を求められることの背景として、男女間に潜在的／顕在的にみられる非対称的な権力の存在を指摘することができる。

しかしながら、装いに関するグローバルヒストリーは、世界がグローバル化し、人びとが同じようなものを着るようになっていく趨勢において、ジェンダーと宗教はこれに拮抗する二大要素であることを示している [ロス 2016: 261-281]。その代表が女性の宗教的な装いであろう。野中葉は、近年のインドネシア都市部では、進学や社会進出をおこなうエリート層ムスリムのあいだでかえってヴェールの着用が選好されていること、さらにそのヴェールがファッションブルになっていることを明らかにしている [野中 2015]。男性よりも女性の側によりローカルな文化に依拠した規範的な装いがみられる背景には、既存研究が指摘してきたジェンダーの非対称性があるだろう。しかし私たちは、女性たち自身による美しさやおしゃれを求める動きが世界の各地に存在していることに注目する立場をとりたい。装いにおける装飾や美しさに関わるジェンダー比較については、今後さらなる検討と考察が必要となろう。

本特集を通じて、これまで布や衣服に限定される傾向のあった装いに関する研究領域の多様性を示し、新たな装いの文化論の構築の可能性が開かれたのではないかと考える。

<謝辞>

本特集の契機となったワークショップ「装い／社会／身体：フィールドワーカーによる通文化比較研究」（2016年1月10日、於：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）は、2015（平成27）年度フィールドネット・ラウンジ企画公募の助成を受けて実現した。企画採択から報告書作成までのあいだ、さまざまな手続きの労を取ってくださったフィールドネット事務局のみなさま、本特集には参加されていないが刺激的なご報告をいただいた中村香子先生、コメンテーターを務めてくださった西井涼子先生、山本芳美先生、中尾世治先生、田中雅一先生、関本照夫先生に感謝申し上げます。特に田中雅一先生には、成果を特集としてまとめるよう勧めていただいた。また中尾世治先生には、フィールドネット・ラウンジ企画の計画段階から本特集の執筆に至るまで、折に触れて議論の相談にのっていただいた。重ねてお礼申し上げます。

＜参考文献＞

- ヴェブレン、ソースティン 1998 (1899) 『有閑階級の理論』高哲男訳、筑摩書房。
- 大澤真幸 2013 『生権力の思想』筑摩書房。
- 小泉潤二 1996 「現代マヤの衣装と政治——グアテマラの場合」『大阪大学人間科学部紀要』22: 319-340。
- 周星 2005 「新チャイナ服、漢服と漢服運動——二一世紀初頭、中国の『民族衣装』に関する新しい動き」韓敏編『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』風響社、pp.437-474。
- ジンメル、ゲオルク 1976 「流行」『ジンメル著作集7 文化の哲学』円子修平・大久保健治訳、白水社。
- 関本照夫 2000 「特集『布と人類学』の狙い」『民族学研究』65(3): 230-232。
- 野中葉 2015 『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版。
- 宮脇千絵 2017 『装いの民族誌——中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』風響社。
- ロス、ロバート 2016 『洋服を着る近代——帝国の思惑と民族の選択』平田雅博訳、法政大学出版局。
- 鷺田清一 1989 『ファッションという装置』(河合ブックレット17)、河合出版。

- Aspers, Patrik & Frédéric Godart 2013 Sociology of Fashion: Order and Change. *Annual Review of Sociology* 39: 171-192.
- Bulag, Uradyn E 2010 Wearing Ethnic Identity : Power of Dress. In Joanne Bubolz Eicher (Editor-in-chief) & John E. Vollmer (Volume editor) eds., *Berg Encyclopedia of World Dress and Fashion Vol.6 East Asia*. Oxford : Berg, pp.75-80.
- Eicher, Joanne Bubolz ed. 1995 *Dress and Ethnicity: Change across Space and Time*, Oxford : Berg.
- Flügel, John Carl 1930 *The Psychology of Clothes*. London: Institute of Psycho-Analysis and Hogarth Press.
- Finkelstein, Joanne 1991 *The Fashioned Self*. Oxford: Polity Press.
- Hansen, Karen Tranberg 2004 The World in Dress: Anthropological Perspectives on Clothing, Fashion, and Culture. *Annual Review of Anthropology* 33: 369-392.
- Maynard, Margaret 2010 Globalization and Dress. In Joanne Bubolz Eicher & Phyllis G. Tortora (assistant editor) eds., *Berg Encyclopedia of World Dress and Fashion Vol.10 Global Perspectives*. Oxford: Berg, pp.252-263.
- Niessen, Sandra 2003 Afterword: Re-Orienting Fashion Theory. In Sandra Niessen, Ann Marie Leshkovich & Carla Jones eds., *Re-Orienting Fashion: The Globalization of Asian Dress*. Oxford: Berg, pp.243-266.
- Polhemus, Ted & Lynn Proctor 1978 *Fashion & Anti-fashion: an Anthropology of Clothing and Adornment*. London: Cox and Wyman.

Introduction: Toward an Anthropology of Dress- Focused on Aesthetics

Chie MIYAWAKI & Mari KAZATO

Keywords: dress, fashion, aesthetics, pleasure, fieldwork

Anthropological and sociological research concerning fashion and dress has discussed how fashion and dress are prescribed and changed by globalization of the production, distribution, and consumption, as well as by social order and identity. However, previous perspectives have overlooked the aspiration for the beauty of dress and the pleasure in the act of dressing in itself.

Therefore, in this special issue, we discuss how people are dressing up, and why specific patterns of dress are preferred. In this article we define dress as not only clothing made from cloth, but also as bodily expression which conforms to the cultural and social norm.

Four articles of this issue cover case studies of dress based on religious notions and specific faith, dress based on subsistence activities which are carried out and adapted to the local natural environment, and body decorations, such as tattoo and mutilation. The subject areas are Asia, such as Indonesia, Japan, Western Siberia, and Republic of Cameroon. We discovered that their dress practices are constructed by the aspiration for aesthetics of dress and the pleasure in the act of dressing in itself.

This paper aims to develop a theory concerning fashion and dress through a new approach, which is focused on the aesthetics for body and the pleasure in dressing yourself, from various angles missed by previous research.